

いのち 生命のにぎわいとつながり

No.84

令和7年1月

皆様、新年おめでとうございます。令和7年は巳年です。手足がなく、長い体をして、あるものは毒を持つなど、身近な存在でありながら不思議な形態と生態を持つ爬虫類、ヘビ。今号では、そんなヘビの謎に迫ります。

ヘビってなにもの？



シマヘビ（千葉県レッドリスト・要保護生物C）

ヘビはトカゲの一部から派生した爬虫類だと考えられています。言い換えれば、トカゲの中には他のトカゲの仲間よりもヘビの仲間と近い親戚関係にあるグループがいるということです。たとえば南西諸島に分布するキノボリトカゲの仲間、日本で目にする機会は稀なイグアナやオオトカゲの仲間、そして北海道や西日本から化石が見つまっているモササウルス類などは、進化史上ヘビに近いトカゲ類とされています。それでは、ヘビはいったいなにをもってヘビなのでしょう？ これはヘビのアイデンティティに関わるヘビーな問題です。

CONTENTS

- 1 ヘビってなにもの？ 1
- 2 生命のにぎわい調査団 現地研修会を開催しました 3
- 3 生物多様性に関する市町村職員研修会を開催しました 4
- 4 千葉県の希少種（スナジクズタケ） 4

◎手足・まぶた・耳のあな

ヘビの一番の特徴と言えば手足を持たない細長い身体でしょう。ボア・ニシキヘビの仲間には後脚の名残であるカギ爪がありますが、それでも一見して手足があるようには見えません。一方、手足がない、あるいは極端に縮退した、身体が細長いトカゲ類も、ヤモリの仲間、トカゲの仲間（ここではヒガシニホントカゲが含まれるグループを指します）、ミミズトカゲの仲間、アシナシトカゲの仲間などに数多く存在しています。そう、手足がなければヘビであるとは言いきれないのです！

もう少しわかりにくいヘビの特徴に、目を覆う鱗があってまぶたきをしないことや耳の孔がないことなどが挙げられます。ただし、これらとて一部のトカゲにも見られる特徴です。日本に分布する種類に限っても、ヤモリの仲間の多くはヘビ同様に目を覆う鱗を持つのでまぶたきはしませんし、キノボリトカゲの仲間は鼓膜が鱗で覆われていて外側から耳の孔は見えません。このように、一つ一つの特徴を挙げればヘビの特徴の多くは一部のトカゲ類とも共有されているのですが、現生のヘビ類は以上のような特徴の組み合わせによって他のトカゲ類から区別することができます。ですから、道路に落ちているロープや木の枝とヘビをしばしば見間違えてしまう私でさえ、細長い身体をした手足がない爬虫類を見つけたときにはすぐにヘビの仲間かトカゲの仲間かを見分けることができるのです。



ヘビの仲間のジムグリ（上）、トカゲの仲間のミナミヤモリ（下左）とサキシマキノボリトカゲ（下右）。ヘビとヤモリ類は目の表面を透明な鱗が覆っていてまぶたがない。また、ヘビと一部のトカゲ類は体外から耳孔が見えない

蛇足ですが、化石のみで知られている初期のヘビ類にははっきりと後脚が見て取れるものもあります。これらの化石は他のヘビ類に特徴的な顎や背骨の

構造を持つことからヘビの仲間であることがわかっています。つまり、ヘビははじめから現在私たちが目にするヘビの特徴をすべて備えていたわけではなく、長い年月をかけて“ヘビらしい”ヘビになったのです。

◎千葉県のヘビ

日本には44種のヘビ類が自然分布していますが、このうち、北海道から九州までのいわゆる本土四島から知られる陸生ヘビ類はわずか8種です。北海道を除けば各都道府県にこの8種が分布しているのですが、千葉県ではタカチホヘビという種の確実な分布記録がなく、この種を除いた7種が知られています。

なかでも私たちが目にする機会が多いのは、アオダイショウとヒバカリというヘビです。アオダイショウは最大で2mを超える大型のヘビで、立体活動に長けており、主に鳥類や哺乳類を食べて暮らしています。中央博物館でも生きた個体を展示しており、展示室内で繁殖した仔ヘビたちも見ることができます。ヒバカリは60cmほどの小型のヘビで、主に両生類を捕食しますが、ミミズなども食べるためか水辺以外でも見ることがあります。私の自宅の庭にもしばしば訪れるので、本種との出会いは初夏の楽しみの一つになっています。毒蛇であるニホンマムシとヤマカガシも比較的見る機会が多く、これらに咬まれた場合には適切な治療が必要になりますが、人間のほうが先に気づけば容易に避けられますのでそれほど危険な存在ではありません。



ヤマカガシ（千葉県レッドリスト・一般保護生物D）

ちょっと恐ろしくも、誰もが知り、好きか嫌いかは別として私たちの心を捉えて離さないヘビ。じっくり見るとその顔は、可愛かったり、かっこよかったり、

はたまたポーっとしていたり。今年はぜひヘビの魅力
を発見する一年としていただければ幸いです。

(栗田 隆気 千葉県立中央博物館)

いのち
**生命のにぎわい調査団
現地研修会を開催しました**
令和6年11月16日(土)

今回の研修会は、松戸市の21世紀の森と広場で、
晩秋の都市公園に生息する生き物を観察しました。当
日は21名の団員にご参加いただきました。

◎千駄堀池での生き物観察

園内にある千駄堀池は大きさ東京ドーム約1個分の
人工池です。

千駄堀地区は元々湧水が豊富であり、池の湧水量
は1日で約1000tあります。研修会ではフィールド
スコープや双眼鏡を用いてカルガモ、コガモなどカモ
類に加えカイツブリなどの野鳥を観察することができ
ました。また、池には条件付特定外来生物のアカミミ
ガメが生息しており、成熟して黒化したオスもありま
した。黒化した個体はニホンシガメと見間違われるこ
ともありますが、研修会では、見分け方のポイントな
どの解説を行いました。



千駄堀池の観察の様子

◎園内に生息している昆虫たち

園内の樹木にかかっているプレートの裏を確認する
とオオトビサシガメなどの昆虫が見られました。この
ような人工物は風をよけることができるため、越冬場
所として利用されています。

草原ではチョウセンカマキリとコカマキリの2種の

カマキリを見つけることができました。多くのカマキ
リは秋頃に成虫となり、冬になると卵を産み生涯を終
えます。研修会ではハラビロカマキリの卵も確認する
ことができました。

ちなみにチョウセンカマキリは名前にチョウセンと
ついていますが在来のカマキリです。



チョウセンカマキリ

◎確認された外来種

水辺にはカダヤシやウシガエルのオタマジャクシ、
アメリカザリガニ等の外来種がいました。

また、水田の近くでは北米原産のウチワゼニクサを
見つけました。本種はアクアリウムなどで栽培されて
おり、観賞魚店などでも販売されています。きちんと
管理できる範囲で栽培するには問題はありませんが、
野外で定着すると根絶するのが難しいので注意
が必要です。



ウチワゼニクサ

今回の研修会では、都市公園という私たちの身近
な場所で様々な生き物を確認することができました。

参加された方からは、都市公園に立ち寄る機会が
あまりないので、都心に近い場所での生物について知

れたのが良かった。昆虫が樹皮の下にいる等、観察のポイントが良くわかった。など様々な感想をいただきました。

次の研修会もみなさまのご参加をお待ちしております。
(佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター)

生物多様性に関する市町村職員 研修会を開催しました 令和6年10月29日(火)

生物多様性に関する市町村職員研修会を開催し、生物多様性を担当する市町村職員41名にご参加いただきました。

本研修は、まちづくりの主体である市町村職員の方々に、生物多様性への関わりについて理解を深めてもらうことを目的に毎年開催しています。

今年度は、生物多様性増進活動促進法と県内における外来水生植物の現状について及び県内における外来昆虫等の現状について研修を行いました。

生物多様性増進活動促進法については、令和5年に生物多様性国家戦略2023 - 2030の策定を受けて2030年までの「ネイチャーポジティブ」の実現と陸と海の30%以上を保全する「30by30」の目標が掲げられたことから令和6年4月19日に公布された本法律について説明しました。

県内における外来水生植物の現状について及び県内における外来昆虫等の現状については、昨年度の本研修会でのアンケートで最も要望の多かった外来生物に関連したものです。これらについては、それぞれ県内における現状と発見した際の対処方法、似た種類との見分け方について説明しました。また、ナガエツルノゲイトウのアクリル標本等を展示して実物を見ていただき、より分かりやすくするようにしました。

(金城 芳典 千葉県生物多様性センター)



千葉県の希少種

スナジクズタケ



(千葉県レッドリスト・要保護生物C)

11月中旬、同僚の鈴木建人研究員(日本神道史)から「珍しいきのこを見つけたよ」と連絡がありました。鈴木さんは千葉県旭市の浦賀神社が12年に1度おこなう「おはまおり」という祭礼の調査をしていたのですが、砂浜の海浜植生の中に見慣れないきのこがあったとのこと(写真)。これは「スナジクズタケ」(ハラタケ目ナヨタケ科)というきのこで、天然の砂浜海岸に生え、傘が褐色で、ひだが黒いことで特徴づけられます。

本種は世界的には南極を除くすべての大陸に分布しています。国内では北海道~九州の砂浜に点々と分布しますが、千葉県内ではこれまで東京湾側の富津市と、太平洋側の銚子市のそれぞれ1地点で記録されたのみで、千葉県レッドデータブック植物・菌類編2023改訂版では要保護生物Cに位置付けられています。自生地における子実体の発生量も少なく、まさに「幻のきのこ」といえそうです。

海浜は塩分や直射日光に見舞われる過酷な環境で、発生するきのこの種類は限られます。本種はヨーロッパではビーチグラスという海浜性イネ科草本の群落内に発生することが多く、特にその落葉上や根際を好むことが知られています。波打ち際に生えることもあるため、植物の根と共生する菌根菌ではなく、植物の残渣を分解する腐生菌ではないかと考えられています。一方で、日本産の本種がどのように養分を得ているのかはよくわかっていません。また、本種は形態的に類似する複数の種からなる可能性も指摘されており、今後の分類学的研究を待ちたいところです。

本種の発生に適した砂浜海岸は世界的に減少の傾向にあります。今回新たに確認された自生地でも、引き続き本種の発生量の推移を見守っていく必要があるでしょう。
(栃原 行人 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No84 令和7年1月15日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。